

# 副詞「きっと」の意味・用法

——川端康成の用例を対象として——

近 藤 尚 子

キーワード

「きっと」 川端康成 副詞 意味・用法

## はじめに

副詞「きっと」は擬態語に出自をもち、近世初期までに陳述副詞としての用法をえた<sup>1)</sup>。本稿はこの「きっと」について、現代における意味・用法を記述することを目的としている。具体的には、国語辞典の記述を整理し、川端康成の用例と比較する方法をとった。現代語の語義や用法を分析する場合、いろいろな方法が考えられるが、内省や作例による分析はできるかぎり避けたいと考えた。しかし個人が調査できる範囲や量には限りがある。また、調査では見出せなかったがこのような用法もあるのではないかと、といった不安も常につきまとう。そこで、調査にあたっては範囲を限定しておくことが有効であると考えた。今回は対象として川端康成全集を選んだが、分析の結果が妥当なものと認められれば、同様の作業を他の作家についても行ない、結果を積み重ねていくことができる。また、そのような作業は現代語の記述に必要であると考えた。

---

1) 寿岳章子氏「擬声語の変化」(『室町時代語の表現』清文堂 昭 56 所収)に論及がある。また拙稿「人情に近きもの——『譯筈初編』の擬声語——」(『国文学研究』第 94 集)でもふれた。

「きっと」の専論に真下三郎氏「近世「急度」考」(『広島大学国語教育研究』8 昭 38. 12)があるが、これは表記を中心に論じたものである。

## 1. 現行の国語辞典における「きっと」

康成の「きっと」の分析に先立って、現在刊行されている国語辞典、日本語辞典十一本の記述を整理した。とりあげたのは以下の十一本である<sup>2)</sup>。

- ① 日本国語大辞典(小学館)
- ② 大日本図書国語辞典 昭38. 初・昭39.10 6版
- ③ 中教出版例解国語辞典 昭31 第1版・昭42.2 第23版
- ④ 角川国語中辞典 昭48.12 初
- ⑤ 学研国語大辞典 昭53.4 初・昭56.2 第11刷
- ⑥ 小学館国語大辞典 昭56.12 第1版・昭57.1 第4刷
- ⑦ 新明解国語辞典(三省堂) '72 初・'84.3 第3版 27刷
- ⑧ 例解新国語辞典(三省堂) '84.4 第4刷
- ⑨ 国語辞典(三省堂) '60 初・'84.4 第3版 第11刷
- ⑩ 岩波国語辞典 '63 第1版・'86.10 第4版
- ⑪ 外国人のための日本語用例辞典

もちろん、国語辞典類の記述は限られたスペースの中で行なわれるもので、完璧を期することはできないであろうし、ここでその不備を責めるつもりもない。考察を進めるための手がかりとして、現代語において「きっと」がどのように記述されているかのサンプルを得るために行なった作業である。

これらの辞典類を、もっとも細かく分類している①を基準に整理したのが表1である。最下欄には五本以上に共通して記載されているものに○印をつけておいた。⑥は用例が少ないだけで、分類は①を踏襲しているので除外するとして、他の②～⑤、⑦～⑪の九本は「きっと」を二ないし三の意味に分類している。①―②は「きっと」本来の用法で、③・⑪を除く9本がこの意味を掲出している。しかし、①―④・⑤、②―①にな

2) このほかに⑫ 学習国語新辞典(小学館)昭33初・昭49.4改訂新版16版をみたが「きっと」は立項されていなかった。なお、⑦・⑧には重要語に\*\* または\* が付されているが、「きっと」には\* がついている。

ると、辞典によってどれをとりあげるかにかなりのばらつきがあることがわかる。

いずれにしても、②～⑪の分類は①を越えてはいないと思うので、以

表 1 国語辞典類の「きっと」の記述

	① 動作・行為がゆるみのないさま					② 推測の 確実性	
	① さっと	② きびしく	③ しっかりと	④ 是が非 でも	⑤ 要望	① 必 ず	② 確 信
① 日本国語大辞典	○	○	○	○	○	○	○
大日本図書 ② 国語辞典		② ○		① ○			
中教出版 ③ 例解国語辞典				○			
角 川 ④ 国語中辞典	②(古) ○	①—② ○	②—②(古) ○			①—① ○	
学 研 ⑤ 国語大辞典		②・③ ○		① ○	① ○		
小学館 ⑤ 国語大辞典	○	○	○	○	○	○	○
三省堂 ⑦ 新明解国語辞典		② ○			① ○	① ○	
三省堂 ⑧ 例解新国語辞典		② ○				① ○	
三省堂 ⑨ 国語辞典		②・③(文) ○				① ○	
岩 波 ⑩ 国語辞典		③ ○		② ○		① ○	
外国人のための ⑪ 日本語用例辞典					○	○	
国語辞典類		○		○	○	○	

下、① の分類を基準にして、康成の「きっと」を考えることにする。

調査の具体的資料としては、昭和43年から刊行された新潮社版川端康成全集全15巻を用いた。昭和43年は康成がノーベル文学賞を受賞した年である。康成は同じテーマで何編もの作品を発表したり、後になって自作に筆を入れたりする作家である。したがって「康成の作品」の範囲を厳密な意味で限定するのはむずかしいかもしれない。しかし本稿では康成個人の改作の跡を追うことはせず右の本文によって分析を行なった。ただし、第12巻後半と第13巻以降の評論・随想・自叙伝等は除き、小説類のみを考察の対象とした。これらの評論・随想・自叙伝等には実際に「きっと」はほとんど見出せない。ほとんど、というのは、これらの作品は康成自身の古い日記や作品（現在では廃棄されてしまったものも含めて）、他人の作品、手紙、ことば等をしばしば引用し、考察の対象となる部分を限定するのが困難だからである。たとえば第14巻「伊豆の踊子」の作者」の中では、後掲の例2を含む部分をたびたび引用し、康成自身が解説を加えているので当然「きっと」も何例か拾えることになる。しかしこれらの「きっと」は用例数に加えるべきではない。このような例を除けば、今回考察の対象から除外した部分の「地」の文には「きっと」の用例を見出せない。

## 2. 康成の「きっと」——その1——

今回の調査で康成の「きっと」は総数192例を得た。これを表1の分類にしたがって検討していく。

まず、「きっと」本来の用法である擬態語の例は4例見出した<sup>3)</sup>。

---

3) 以下康成全集の本文にしたがって、旧仮名遣い、(可能な限り)旧漢字で引用するが、康成自身はこのことにはそれほどこだわっていなかったようである。昭和23年から刊行された全集の「あとがき」でつぎのように述べている。文章全般にかかわる記述もあるので少し長くなるが引用する。

使用漢字や送り假名は統一しない。その時々々の気分や私の癖は幾分残しておいた。(中略)統一が付き、正確である方がよいのは言ふまでもないが、今日の國語ではむづかしい。漢字の問題、送り假名の問題に、私一個人が書く場合にすら、私はまだ解決を持ち得ないのである。

1. 胸に鎖附きの銀めだるを下げた櫻子は、両端に窪みが出来るくらゐきつと結んだ深紅の脣と、それを守る下ぶくれの頬に、驕慢の色を漂はせ、小屋の左端まで来たので、馬の頭をめぐらせた。(一『招魂祭一景』51)
2. はしけはひどく揺れた。踊子はやはり脣をきつと閉ぢたまま一方を見つめてゐた。(一『伊豆の踊子』224)
3. 一緒になつてゐたら、そんなことはなかつた。あつても必ず救ひ起してみせた。女の身を投げ出しても、男の命一つ死なせはしなかつた。自分のなにが惜しくて縁を捨てたのかと、砂囊に涙がこぼれた。熱い生きもののやうに砂囊を抱き上げて温た。/なぜかただもう濫い力が體中にみなぎつて来て、きつと立つと、出發の銃聲を聞いた。(五『冬の曲』261)
4. 「僅か十四五町の道を一時間もかかつて来た病人だと思つてくれ給へ。」と、男は新聞紙を顔にあてて咳入つた。膝頭をきつと合はせて、汚い手の指が新聞紙と一緒に顫へてゐた。(六『掌の小説 質屋にて』292)

3は「すばやく」という意味を含む点で他の2例とすこし異なる。表の分類でいえば、例1・2・4は①—③、例2は①—②にあたる。しかし、康成の「きつと」として考えた場合には、わずか4例であり、それをさらに細分化せずに「擬態語の「きつと」としてまとめてしまつてよいであらう。

---

私は常に現代日本語に悩み迷ひ續けて来た。國語を整へ美しくしたい志はあるものの、一作家としての仕事のうちにそれをいささかあらはしてゆくほか、最早私の餘命はないやうである。(中略)

しかし私は中學生のころ平安朝のものを聲出して讀み、一高生のころ日本ロオマ字會にちょっと顔出しした、その影響は深いとみえて、漢語をつとめて避け、やまとことばに惹かれ、耳で聞いて分る國語といふ考へは終始離れなかつた。そのためになほ私の文章の音が弱まり線が細る傾きはあつた。(中略)私の文章は現代假名づかひに直されてもさほど苦痛はないつもりである。歴史假名づかひによらなければ味も匂ひも失はれるやうな文章を私は書いてゐないつもりである。(十四『獨影自命——作品自解』17)

表の分類 ①—④・⑤ は推量を含まない「かならず」という意味の「きつと」である。1人称について用いれば強い意志を、2人称について用いれば強い勧誘をあらわす。

5. 「僕、實はサラリイ・マンぢやないんですよ。神田の商店の番頭なんです。商店の勘定日は三十日で、今日はほんたうにこれでみんななんです。三十日にはきつとうめ合せしますから。」と、男はほんたうに両手を突いて、心から私に詫びるのだつた。

(二『浅草日記』229)

6. けれども、こんなに溢れて来る心は天にもとどきさうで、義兄も産れる子もみんなきつと護つてあげると、遠くへ掌を合はせる氣持になると、生き生きとありがたかつた。(六『掌の小説 十七歳』341)

7. 「いや、いやよ。」

高子は後ずさりした。

「明日でなく、今日でもいいわ。外できつと會ひますから、歸つてちやうだい。ねえ、出て行つてちやうだい。」

(十一『あの国この国』150)

8. 「一年に一度でいいからいらつしやいね。私のここにある間は、一年に一度、きつといらつしやいね。」(五『雪國』334)

9. 甘栗の袋を私に渡して、

「それぢや、さよなら。ここから市電で歸るからね。この次は第三日曜だよ。六時頃に雷門で待つてるよ。きつとだよ。なにかあれば、いつ電話をかけてくれてもいいのだよ。(後略)」

(二『浅草日記』246)

最後に掲げた例9は「待つてるよ。」を強めているのではなく、隠された「来てくれ」という気持ちを強めているとみて勧誘の例とした。つぎの『古都』の例も同様である。

10. 「ひつこいやうどすけど、時代祭には、きつとな。御所の西門、蛤御門どつせ。」

「はい。」と、苗子は深くうなづいた。(十二『古都』156)

「かならず」の「きっと」のうち、1人称に用いられているものは8例、2人称に用いられているものは7例である。このほかにここに分類すべきと思われる一群の例があるが、これについては後述する。

これまで述べてきた「きっと」は推量にかかわらないものであった。「きっと」を含む部分が判断を述べているとき、「きっと」は推量を強める。これが陳述副詞としての「きっと」である。たとえば次の例は主体が1人称であっても「窮屈な思ひをする」は判断であって、意志ではない。

11. 夏子は泣きさうな姿だった。しかし、ここで氣を取り直したら、またきつと窮屈な思ひをする、それよりは泣いたつていいと思ひながら、夢のやうな體を男に寄せて歩き出した。

(三『化粧と口笛』189)

さきほどの表に分類した国語辞典類の記述には、この意志と②—1とが必ずしも明確でないものがみられるが、この2つは区別すべきであると思う。

陳述副詞としての「きっと」の標準的な形は文末に「～だろう」、「～と思う」など推量を伴うものである。これは60例見出した。まず「～だろう」の例を掲げる。

12. ところがどうでせう。私が生き返つてみると、海はまつ青でした。(中略)私が生き返らなかつたならば、海はきつとまつ黒だつたでせう。(一『青い海黒い海』190)

13. ほんたうに、半町ばかり離れて、私の用心棒が、私たちの後をつけて来る。彼とつれだつて、もう一人大きな男が歩いてゐる。きつと私の用心棒が、男の眼をくらませるために、通りがかりの人と連れらしく見せようとしてゐるのだらう。(二『浅草日記』232)

14. 鳥居博士が洋行すれば、自分も後から聲樂の勉強に行く、遠い外國で二人つきりになつたら、きつと結婚するだらう、そんな二人の間の話が思ひ出された。(四『イタリアの歌』73)

15. 露骨にも聞え、婉曲にも聞えるやうに、菊治は言つたのだが、夫人は素直に、
- 「あの子はお目にかかるのが、きつとつらかつたんでせう。」
- (八『千羽鶴』26)

次に「～と思う」の例を掲げる。

16. 彼は笑ひ出した。づかづかと近寄つて、西洋風に彼女の手でも握りさうな形だつた。

「きつとこの橋をお通りだと思ひました。温泉宿へ下りて行くには、この路しかありません。」(一『春景色』230)

17. 「私達、一生この子のことを思ひ出すでせうね。」

「覚えてゐるね。」

「きつと忘れないと思ふわ。もう二度と會ふことはないでせうけれど……」(五『燕の童女』111)

18. 「きつと戻つて來て下さると思つて、電燈を消さずにお待ちしてゐましたわ。明るいままもつと白い蚊帳を眺めてゐたいわ。」

(六『掌の小説 朝の爪』144)

19. 「木崎さんに、お住みいただけませんか?」

「私に…? お父さんの家にね? それはありがたいですな。」

木崎は意外な顔もしなかつた。

「さうしていただければ、父もきつとよるこぶと思ひますわ。」

(十『日も月も』241)

否定推量の「まい」を伴うものも一例見出した。

20. 「(前略)人間が少いから罪悪が少く、梯子<sup>はしご</sup>の上の巡査は張合が抜けて双眼鏡枕に居眠りをしてしまふよ。そしてきつと、犯罪を發見する肝腎な双眼鏡を盗まれて、こつりと頭を枕から落しても目が覺めまいね。(後略)」(一『空に動く灯』101)

「～やうな気がする」という文末表現をもつものも二例見出した。これも「～だろう」「～と思う」と同類と考えられる。



21. そのくせ、病氣の報せなんか出さなくともきつと今村達が見舞ひに  
来てくれるやうな氣がして、道やアパートの廊下の足音に、しきり  
と聞耳を立ててゐたが、冷たい雨の朝にたうとう葉書を書いた。

(三『夢の姉』340)

22. 「この麻子の手紙には、京都の妹のことが、きつと書いてあるやう  
な氣がしますの。」(七『虹いくたび』328)

「きつと～にちがいない」という表現も推量であるが、「～だろう」、「～  
と思う」に比べると全体として確信に近い、強い表現になっている。この  
例は7例である。

23. 私は幼なごころにも、その日に限つての自分の深切を蟲の知らせで  
あつたのだと思ひまして、祖母は日頃の私のわがままをきつと許し  
てくれたにちがひないと、甘い心やすさを覚えるのでありました。

(二『父母への手紙』322)

24. 竹三郎は東京へなど出たら道々人も振り返るだらう、荒くれた顔の  
大男で、一目見れば忘れられないほどだから、宿屋などではきつと  
覺えてゐる者があるにちがひないと、人相等も宿屋へ報せてやつた  
ところ、さういふ漁夫じみた男は泊つたことがないとの答へだつ  
た。(四『田舎芝居』15)

25. 「父が言つてゐましたわ、今のお宅は木崎さんにはお粗末だから、  
今にきつといいおうちが、天から授かるにちがひないつて……」

(十『日も月も』242)

「きつと～だろう」などのように文末に推量をともなう表現を、陳述副  
詞「きつと」の標準型だとすると、「きつと」はあるけれども推量表現がな  
い、いわば非標準型の例も見られる。康成の場合、これは標準型の70例  
よりも多い81例である(数の上からみると標準・非標準という名称は適切  
ではないが、ここではとりあえずこう呼んでおく)。表現の上から見れば、  
断定か推量かという相違は一に「きつと」の存否にかかわるのであって、  
この「きつと」は確信にかなり近いと考えられる。また自分をも含め誰か

を説得するはたらきもあるようである。

26. 「いやあ、もうざんぎりお弓で澤山だ。」  
「あんなこと。——だけど、一度見せたげるわ。朝がいい。明公とでも行つてごらん。(中略)おしんでなくつても、ゴウカイヤの一人や二人はきつと見られますわ。」(二『淺草紅團』22)
27. 彼は廊下に出て長良橋を渡つて來る人を一々眺めてゐた。橋の遠くを歩いてゐる女は皆弓子に見えた。(中略)たうとう彼女を待ち切れずに晝飯を二時に取つた。  
「何か起つたんだね。きつと寺で出さないんだ。——よし、僕が連れ出して來てやる。」と水澤が袴をつけて出て行つた。  
(二『南方の火』392)
28. 「うちの者にだけそつと見せてやりまして、よく隠しときます。」  
「隠せませんよ。いつかどこからか、きつと出て來ます。」  
(五『寒風』205)
29. 「あのお醫者さんの書いてることは、みなほんたうなんでせうが、言ふ必要があるでせうかね。きつと、あのお醫者さんは非常な正義派なんですよ。(後略)」(五『寒風』214)
30. 「(前略) あんな芝居がかりな横柄な口をきいて、あいつきつと社會主義ですよ。」(六『掌の小説 質屋にて』293)
31. 「鳴いてますね。しかし、あの麥畑の上の雲雀と同じ雲雀だかどうか、わかるもんですか。雲雀はいくらだつてゐますよ。」  
「きつとあの雲雀ですわ。」(七『虹いくたび』242)
32. 寢靜まつた階下に、電話のベルがひびき渡つた。  
「きつと僕だ。」と影山はあわてて部屋を出て行つた。  
(十『横町』392)
33. 「老いぼれの死はみにくいね。まあ、幸福な往生に近いかもしれんが……。いやいや、きつとその老人は魔界に落ちてゐるよ。」  
(十一『眠れる美女』304)

この「きっと」は自分にせよ他人にせよ、誰かを説得するはたらきもあるようである。いずれも「ですわ」、「ですよ」、「あるよ」など話しかけるような文脈の中で用いられている。

### 3. 康成の「きっと」——その2——

前節では、国語辞典類の記述を整理した結果にそって康成の「きっと」を考えたが、ここではそのどれにもあてはまらないものについて述べる。

まず、「かならず」の「きっと」に分類されるものとして、ある事柄が確実に実現することを表わす「きっと」がある。「きっと」を含む部分は判断ではなく事実であるという点で11~33に掲げたような推量にかかわる「きっと」とは区別すべきであろう。この場合多く「~すると」という条件が前にあり、その条件下で後に述べられた事項が実現するという形をとる。この「きっと」は、「きまって」といいかえることができるという点でこれまで掲げてきた例とは異なる。

34. 彼がミイラの本を開くと、妻はきつと泣き出すのであるが、しかしなぜ彼は毎日『死者の書』ばかり読むのであろうか。

(一『死者の書』249)

35. 「銀座へいらつしやいまして、犬をつれて?」(あら、銀座だつて?)

「ええ、銀座を歩きますと、きつと二人や三人、何種かつて聞く人がございますわ。道の真中で、西洋人に賣つてくれと言はれて困りましたわ。」(二『水晶幻想』200)

36. その證據には、同じ温泉宿の客と町へ遠征に行つた時なんか、僕が凄い程あたるもんだから町の奴が持數を隠してゐると言ふんだ。

(中略)それなのにこの玉臺へ歸るとゲエムにはきつと負ける。どうしても玉運が向いて來ないんだ。(六『掌の小説 玉臺』87)

また、次の例は「~すると」という条件句のかわりを「棄鉢に心の荒れた時には」がつとめている。

37. けれど、このどうにでもなれと、棄鉢に心の荒れた時には、妙なも

ので、きつとどちつてしまふ。(二『浅草日記』231)

さらに次のような、条件句のない例もある。

38. (前略)焼く時鍋に菜種油を引くことを思ふと、焼けてから臭ひがしなくても嫌だつた。鍋についてゐた表面をきつと祖母か女中かに剥かせてから食べた。(一『油』62)

39. あなたのお歸りの時間はまちまちでありましたし、郊外の停車場から家へは、(中略)二つの道がありましたけれど、私達は道の半ばできつと出會つたのでありました。(二『抒情歌』356)

この、「かならず」実現することを表わす「きつと」は康成に9例見られる。

国語辞典類に記述されないものとして取り扱いたいもうひとつの「きつと」は、文末に置かれる「きつと」である。これは独立した分類として1項にまとめることはできないであろうが、少なくとも推量にかかわる「きつと」の中ではひとつのまとまりをなすものとして考えたい。

「きつと」は判断をあらわす部分のどこに重点をおくかによっていろいろな位置におかれる。

40. 「私はあなたがきつと迎へに来て下さると思つてゐたのよ。」

(二『落葉』271)

右の例39において判断する主体は「私」であり判断の内容は「あなたが迎へに来て下さる」ということである。「きつと」は「きつとあなたが」のように判断の最初に来ることも可能であるが、康成の例では右の例40のように用言の直前に「きつと」がおかれているものも多かった。前掲15,22の例などがそれである。

15. 「あの子はお目にかかるのが、きつとつらかつたんでせう。」

22. 「この麻子の手紙には、京都の妹のことが、きつと書いてあるやうな氣がしますの。」

さらに、「きつと」が判断の最後に来ることがある。これは断定的な口調を、あとから「きつと」を添えることによってやわらげているもので、

この「きっと」は「たぶん」と同じくらいのむしろ弱い意味だと考える。康成にはこの文末の「きっと」が13例見られる。

41. 「ああ、おいしい。食堂の横を上つて来るうちに、水道にもお味がつくのかわ、きつと。」と、彼女は水を飲む鳥のやうに、柔かい咽を伸して舌鼓打ちながら、(後略)(二『浅草紅團』82)
42. 「どうして花子を僕んどこへ泊りによこしたの?」  
「そんなことが分らないの? 私達がね、みんな木村さんを好きだからよ、きつと。私はさう思ふわ。」(三『虹』350)
43. 「(前略)やはり口紅を持つて行つたわ。盗んだわけぢやないでせう。自分がないからほしいのとはちがふのよ、きつと。ただ、私の使つてゐる口紅が、ふつと欲しくなつたのよ。」(七『再婚者』402)

例42のような場合が、この「きっと」のはたらきをもっともよく示している。つまり、一旦「好きだからよ」と断定してしまつたところを、「きっと」を添えて推量であることを表わし、さらに「私はさう思ふ」と付け加えているのである。このような「きっと」が他の文学作品にどの程度見出されるのかは、今後の調査に俟たねばならないが、きわめて話しことば的であると思う。康成の用例に限っていえば、13例中12例までが女性の会話の中に用いられている。

#### 4. ま と め

2, 3における分析の結果を先に掲げた表と対照させて示すと表2のようになる。上段には参考のために表1の最下欄を再掲した。

康成の「きっと」はまず大きく3つに分けられる。すなわち、①擬態語の「きっと」、②「かならず」の「きっと」、③推量の「きっと」である。②と③とは「きっと」を含む部分が推量にかかわるかどうかによって区別される。

①擬態語の「きっと」は康成に4例しか見出せなかつたので無理に下位分類をせず一括した。現代語の用例がもっと増えてくれば、いくつかの

表 2 康成の「きっと」の分類

国語辞典類	動作行為がゆるみのないさま					推測の確実性			
	さつと	きびしく	しつかと	是が非でも	要 望	必 ず	確 信		
		○		○	○	○			
川端康成	① 擬 態 語		② かならず			③ 推 量			計
			① 実現	② 意志	③ 勧誘	① 推量をつよめる	② 確信に近い	③ やわらげる	
	4		9	8	7	70	81	13	

下位分類が必要となるかもしれない。

②「かならず」の「きっと」の① 実現は、3で述べた、ある事項が確実に実現することを表わす「きっと」である。「きまって」といいかえることができる。これは判断ではなく事実に関すると考えて②の下に分類した。

③ 推量はさらに3つに分けた。これらは下位分類ではなく、ニュアンスの違い、あるいは表現効果と考えるべきものかもしれないが、可能ならば推量にかかわる場合の強さを色分けしたいと考えた。①と②とは文末表現によって、③は「きっと」の位置によって、いわば形態的に分類した。「きっと」のはたらきは①を中間とすると②は強め、③は弱めであると考えている。①・②は「かならず」といいかえられるが、③は「たぶん」ほどの強さではないだろうか。

用例数をみると③ 推量の「きっと」が192例中164例と全体の85.4%を占めている。「きっと」の③ 推量への傾斜は時代的推移であろう。今回補助資料として、新聞1週刊分、雑誌3誌3冊<sup>4)</sup>を調査してみたところ、

4) 調査の範囲は次のとおり。

新聞 a 朝日新聞 昭63.6.14~20の朝夕刊  
雑誌 b 朝日ジャーナル 昭63.6.24号

「きっと」は10例見出したが、すべて③推量に分類される例であった(内わけは①7例、②3例、③の例はなかった)。ただしこのうち9例は、会話あるいは会話的な文体の中で用いられており、例外は次の1例のみである。

44. 赤と緑の文字だけという装下も、村上氏の考えで作ったもの。(中略)きっと村上氏には、この小説の最初から最後までを自分で完結させたいという思いがあったのだろう。(「サンデー毎日」)

同様の傾向は康成にも見られる。女性の明らかな会話中の用例に限っても、116例(61.4%)にのぼる。このことは推量の「きっと」のきわめて話し言葉的な性格を予想させる。擬態語の「きっと」4例がすべて「地」の文中に用いられているのと対照的である。

また、康成の用例について②—①実現を分類として立てたが、前掲38,39などの例は筆者としてはやや抵抗を感じる用法である。「きっと」に対して「食べた」、「出会った」という過去形で文末を終止しているためである。筆者の感じる抵抗が推量に傾斜した現代語的な感覚に起因するものなのか、あるいは現代語にも実はよく見られる用法なのか、用法に地域差はないのか、などといったことは今後の調査をまって解明しなければならない。例38,39のような用法が他の資料にどの程度見出せるのか、興味深いところである。

本稿では「きっと」の周辺の話、「たぶん」や「おそらく」、「かならず」について述べる余裕がなかった。これらをも分析したうえで康成における「きっと」を位置づけるべきである。さらに資料をひろげることによって

---

c 週刊文春 昭63.6.23号

d サンデー毎日 昭63.7.3号

各資料の内訳は、a 2例、b 1例、c 2例、d 5例である。同じ週刊誌でも「朝日ジャーナル」には少なく、「サンデー毎日」には多い。c, d は記事そのものに話しことば的な文体を用いることが多い。しかし、たとえば康成の小説でも新聞の観戦記をもとにした『名人』には「きっと」が1例しか用いられないことから考えても、この補助調査の対象に新聞・雑誌を選んだのは適切でなかったかもしれない。

現代語における陳述副詞の意味・用法を明らかにすることができると思う。さらに「きっと」に関していえば擬態語から陳述副詞へという歴史的な推移を考えることによって、副詞語彙の意味の変化・発展をたどりたい。本稿はその第一歩としてのささやかな試みである。